十一　努力と創意工夫の人

栄養菓子を作り出した　江崎利一（一八八二～一九八〇）

江崎利一は、明治十五年（一八八二）十二月二十三日、今の佐賀市蓮池町大字蓮池の薬種業の家に八人家族の長男として生まれました。

小学生時代、家のくらしは楽ではなく兄弟も多かったので、水くみなどの家事手伝いや弟や妹の子守りに明けくれました。そんな中でも、勉強にはげみました。一生けんめい勉強した利一は、旧制中学か商業学校に進学したいと願うようになりました。しかし、父親は、「無理して上の学校に行かんでもいい。よく働き、努力すれば学校出に負けんりっぱな商人になれる。それが、家のためでもあるし、利一自身のためでもある。」と言って、進学することを許してくれませんでした。小学校を卒業すると、家業の薬種業を手伝い、父親といっしょに薬を売ってまわりました。

江崎利一（㈱江崎グリコ所蔵）

明治三十三年に家業をつぐと、本格的に商業や薬業の勉強を始めました。それらの勉強は、学校に入学して習うのではなく、本を取り寄せ、すべて自分一人で勉強するという独学でした。

大正八年（一九一九）三月、栄養菓子を作るきっかけとなった出来事に出会いました。それは、薬を売ってまわっている途中、筑後川ぞいの堤防にさしかかった時のことでした。ふと堤防の下の川原に目をやると、

川岸の小屋で貝のカキをゆでていました。利一は、いつか読んだ新聞の記事を思い出しました。その記事にはこのように書かれていたのです。「近ごろ、世界的によいとたたえられている栄養剤グリコーゲンは、日本の貝類、特にカキに多くふくまれている。」と。そこで、すぐにカキの煮じるを分けてもらい、ガーゼでこして水あめぐらいに煮つめた後、九州帝国大学の薬局に送り成分を調べてもらいました。結果は、グリコーゲンが四十〜四十二％も入っていることが分かりました。そればかりか銅やカルシウムもふくんでいて、りっぱな栄養剤になることが証明されました。利一は、「こりゃ、えらいものを見つけたぞ。」と、心がおどりました。

また、ある日、九州帝国大学をたずねた時、一人の先生が、「これからの医学では、病気のちりょうだけでなく、病気にかからぬ体をつくるという予防こそ、もっと大切だ。」という話をしてくれました。その時、はっとひらめいたことがありました。栄養剤のグリコーゲンを菓子の中に入れることを思いついたのです。

このようなカキ汁やお医者さんとの出会いが、栄養菓子の誕生のひみつだったのです。

さっそく、利一は、工夫を重ねながら、次々に栄養菓子の試作品を作っていきました。もう四十歳近くになっていました。菓子の色や形、名前、入れ物、マーク、せんでん文句などはどうしようかと頭をひねりました。考えに考えたあげく、名前は栄養剤のグリコーゲンから取ることにしま

有明海とカキ

した。形は心臓を表すハート型に、マークは元気な子どもに育ってほしいという願いから両手を上げたゴールインのすがたにしました。せんでん文句は「一つぶで三百メートル」にすることにしました。実際に一つぶの菓子の中に三百二十メートル走る分のカロリーを入れました。このようにして作り上げた栄養菓子を目立つ赤い箱につめて、大正十一年大阪で売り出しました。

栄養菓子がたくさん売れ始めたのは、昭和の初めごろオマケサービスをしてからです。子供のようすを観察していると、食べながら遊び、遊びながら食べていることに利一は気がつきました。子供にとっておやつと遊びはきりはなせないと思いました。そこで、お菓子にオモチャを付けたら子どもがたくさん買ってくれるのではないかと考えたのです。この考えは見事に当たりました。たくさん売れる製品を作った原動力は何といってもこのような創意工夫だったのです。

昭和十九年、二十年(一九四四、四五)日本はアメリカと戦争中でした。工場は爆弾でこわされ焼かれ、二十数年もかかって築き上げてきた会社をいっしゅんのうちに失ってしまいました。やがて、戦争が終わり、再び会社を立て直し、栄養菓子を作る仕事に取りかかりました。利一は六十三歳になっていました。しかし、戦争で日本にはほとんど物がありませんでした。こんな時代に栄養菓子の原料や材料を買うのは大変でした。たった一つ残っていた車を売って、原料や材料を何とか仕入れ、必死になって仕事をしました。オマケ

栄養菓子と今、むかしのオマケ（㈱江崎グリコ所蔵）

付きの栄養菓子ができるまでにこぎつけた時は本当にうれしくてたまりませんでした。

栄養菓子の仕事がうまくいくようになると、つぎにチョコレート作りに取り組み始めました。それまで、チョコレートといえば板チョコと思われていました。チョコレートにアーモンドを丸ごと入れてみたり、形も四角から丸みのある形にしてみたりして、チョコレートのイメージを変えてみることにしました。このチョコレートは大変な売れ行きでした。ここでも、やはり創意工夫が売れる製品作りの原動力でした。

創意工夫されて作られたチョコレート（㈱江崎グリコ所蔵）

栄養菓子を作り出す前、近所に住んでいた先生や父親から「売る方も買う方もたがいにもうけなくては、本当の意味の商売は成り立たないし発展もない。」「金ができたら社会に奉仕せよ。」という教えを受けていました。その教えはいつも利一の頭からはなれませんでした。栄養菓子を作り始めてから十一年目に「母子健康協会」を作り、母親や子どもの健康をよくするための社会奉仕活動を始めました。利一は、もうけることだけを考えていたわけではありませんでした。今もこの会社では、子供のための医学研究に助成しています。

江崎利一は、常に工夫、努力を続けた人です。いつもまわりの人たちに、「どんな小さなところに発展のカギがひそんでいるかわからない。大切なのは、それをどう見つけ、どう生かすかということである。」と語っていたそうです。

一生けんめい努力し、創意工夫し、あきらめずに最後までやり抜くことが、成功する「ひけつ」と言えそうですね。